

2023年12月3日 久宝教会 第1アドヴェント礼拝メッセージ

「神の救いを見る時」

牛田匡牧師

聖書 イザヤ書 52章1-10節

いよいよ12月に入り、朝晩の冷え込みが日に日に増してきていますが、皆様は如何お過ごしでしょうか。街中でも、保育園でも施設でも、あちこちにクリスマスツリーが飾られて、イルミネーションも点灯して、華やかなクリスマスの雰囲気を感じられる季節となりました。教会でも今日からいよいよクリスマスを待ち望む「待降節(アドヴェント)」が始まりました。

クリスマスの時期になると、教会にあまり縁がない人でも「キリスト教」や「イエス・キリスト」という人の名前について、耳にする機会が増えるのではないかと思います。その際に「そもそも『キリスト』って何ですか」と尋ねられると、教科書や辞書に載っている答えとしては、「『救い主』のことです」となります。ヘンデル作曲の「メサイア」など、クリスマス・コンサートのチラシなどには、「救世主」と漢字で書かれているかもしれませんが、しかし、今の私たちの普段の生活の中では、「救い主」や「救世主」という言葉は、ほとんど使われることがなく、「教会用語」になってしまっているのではないのでしょうか。そのような中、「救い主」という言葉が持っている意味とは、一体何なののでしょうか。

日本語の「すくう」という言葉の語源は、「金魚すくい」などで馴染みのある、水の中から物を「掬い上げる」という言葉と同じなのだそうです。つまり、水に溺れている人を掬い上げたり、引っ張り上げたりして助け出すこと、それが「救う」ということです。ギリシャ語(ソーツォー)の元々の意味は、韓国語の挨拶にある「アンニョン(安寧)」に近いと思いますが、「安心」とか「安息」という意味だそうです。ですから、危機的な状況から助け出されて、安心してホッと一息つくことが出来た状態、というのが、本来の「救い」という言葉の意味なのだと思います。そして今、この世界の中で切実に「救済」や「救い」を待ち望んでいるのは、戦禍の中にいる人たちなのではないかと思います。

先月11月24日から、一時停戦が行われていたイスラエルとパレスチナの武装組織ハマスの戦争ですが、双方の人質の交換などが行われたものの、一時

停戦は 7 日間で終わり、再び戦闘が開始されたとのこと。もうすぐ戦争が始められて 2 ヶ月になってしまっていますが、これまでに犠牲となった方々の数は、公表されているだけで 1 万 5000 人以上、その内約 1200 人がイスラエル側の犠牲者であり、1 万 3000 人以上がパレスチナ側の犠牲者、さらにその半数以上はパレスチナ自治区内の子どもたちだとも報じられています。逃げ場もなく、ライフラインも絶たれている圧倒的格差の中で、このような殺戮が続けられている意義はどこにあるのでしょうか。

第二次世界大戦の際、ナチス・ドイツが行ったユダヤ人への大虐殺「ホロコースト」の追悼と、その負の記憶を学び続けるための施設として、かつてのユダヤ人強制収容所を、「アウシュビッツ・ビルケナウ博物館」として維持管理している国際アウシュビッツ評議会が、先月 18 日にこのイスラエルとハマスの戦争に対する公式声明を発表しました。そこではまず「ハマスのテロリストによって人質にされ、拷問され、殺害された犠牲者の方々の苦しみ、痛みと悲しみに共感しつつ、世界中のイスラエル人とユダヤ人との揺るぎない連帯を表明したい」と述べられ、さらに「イスラエル国家は、国際法と人道主義の原則に従って自衛権を有する。自由で主権のある民主的なユダヤ国家の存在は、世界平和の柱の一つです」と述べられていました。もちろん、ガザ地区の人々に対しても、「テロリストが犯す想像を絶する憎悪と暴力は、より広範な苦しみをもたらすだけであり、ハマスが『人間の盾』として搾取しているガザの一般市民にも影響を及ぼしている」と言及されていましたが、イスラエル側の 10 倍以上の犠牲者が出ているガザ地区に対して、「影響が及んでいて、残念だ」と言うだけなのには、驚きました。ホロコーストへの深い反省の上に立っているはずのアウシュビッツ評議会ですら、「民族や国家という枠組みを超えて、全ての人間の生命が尊重されるべきであり、そのための即時停戦を求める」と言うのではなく、ユダヤ人国家としてのイスラエルを偏重して、ガザ地区の人々の命を軽視するというのは、あまりにも歪んでいます。おそらく、背後には政治的な力も働いているのでしょう。

パレスチナのガザ地区において、頭の上から雨やあられのように爆弾が降り注いでくる中では、人々は生きた心地など、とてもしないはず。やっと一時停戦

の期間を迎えられた時には、それこそ久しぶりに深呼吸が出来たのではないかと想像します。しかし、そのような時は長くは続かず、再び戦闘が開始されてしまいました。今、この地上の地獄にあっての人々の切実な祈りは、「神様、どうか助けてください。この地獄から救い出して下さい。水と食料と横になれる場所、深呼吸できる時間を与えてください」というものなのではないかと想像します。

そして、そのような祈りは、聖書に記されている古代の人々にも共通のものでした。今回の聖書の言葉は、戦争に敗れたために故郷のエルサレム、シオンの丘から遠く離れた外国、バビロニアに捕虜として連れて行かれた古代イスラエルの人々に向けて告げられた、預言者の言葉でした。1 節「目覚めよ、目覚めよ」は、「起きよ」「立ち上がれ」とも訳される言葉です。目を覚まして、立ち上がり、出発のために身支度しなさい、「力をまとい、美しい衣をまとえ」と続きます。もちろん、捕囚民としての生活、それこそ収容所の中での生活では、そのような美しい着物などなかったでしょう。しかし、「全てを諦めてはしまわないように、再び立ち上がる時が来た」ということを預言者は告げたのだと思います。2 節にある「あなたの首の縄目を振りほどけ」という言葉も、実際に捕囚民たちがみんな首に縄をつけられたまま、強勢労働をさせられていたかどうかは分かりません。ですが、「自分たちはずっとこのままで、助からない。外に出られない。故郷に戻ることが出来ない」という絶望や諦めは、自分で自身の首を締める縄目になっていたのではないかと思いますし、そのような縄目を振りほどけ、と語られています。

続いて、人々を無償で、無条件で、奴隷から自由人へと買い戻し、贖ってくださる神(3 節)は、その名を「私はここにいる」という神だと言われています(6 節)。これは「出エジプト記」3 章 14 節に出て来る神様の名前ですが、捕らわれの身となっている時でも、絶望の時でも、いつでも、どこでも、必ず共にいてくださるということを表しています。そして必ず来る救いの時、解放の時には、人々は歓声をあげながら、故郷に帰って行く。そしてその姿を見る全世界の人々は、神の救いの業を知る、と述べられています。

さて、このイザヤの預言は、今から二千数百年前の古代イスラエル民族の歴史を述べているだけの言葉なのでしょうか。21 世紀となっている現代でも尚、人類

は愚かな戦争を続けていて、命が奪われることに日々に怯えている人たちが大勢おられます。その人たちが神の救いを見るにはどうしたらよいのか。「神様はいつでも、どこでも共にいてくださる」と言いながら、目の前で人々が傷つけられ、命を奪われて行くような地上の地獄の中で、また常に爆弾が降ってくる中で、本当に神様は共にいてくださるのか。その問いは、私たちにもまた問いかけられているのだと思います。言い換えれば、私たちもまたその問いからの挑戦を受けている。そしてまたその問いに答えるように、招かれているとも言えるのではないのでしょうか。

クリスマスを待ち望む季節を迎えながら、そもそもクリスマスの何が嬉しいのか、クリスマスをお祝いするのは何のためか、クリスマスの意味とは何なのか、などということを改めて思わされています。神の子が人間となった、しかも一番小さく無力な存在である赤ちゃんとして生まれて来た意味とは何か。「飼い葉桶(まぶね)」の中に寝かされていた意味とは何か。2000 年以上を経た今日、そこから私たちが受け取るメッセージとは何か。「神の救いを見る時」はいつか。もし、それが「今」であるなら、それはどこにどのようにして見ることができるのか。そのために私たちがなすべきこと何か……。クリスマスまでのあと 3 週間、世界の平和を求めつつ、クリスマスの意義を自分自身の中で静かに深めていくことができるようにと願っています。